

<資料紹介>

田名宗經の木彫

津波古聰

(沖縄県立博物館)

<Short Note>

A Few Wooden Sculptures made by Soukei DANA

Satoshi TSUHAKO

(Okinawa Prefectural Museum)

当館に収蔵されている彫刻は石彫と木彫があり、両者とも第二次世界大戦により多かれ少なかれ何処か損傷を受けている。特に木彫はその材質の性質上、虫食い・剝離・破損・褪色等により損傷が甚だしく完全なものは少ない。木彫は円覚寺に安置されていたと思われる仏像や戸板・羽目など建築物の装飾部分が多く含まれている。仏像は釈迦如来座像や観音座像、十六羅漢像などがあり、戸板や羽目などは龍や鳳凰、牡丹唐草の浮き彫りまたは透し彫りの彫刻がなされている。これら木彫のなかに欄間などの隅に取りつけられたと思われる対の小さな彫り物がある。

小さな彫り物は今回はじめて紹介するもので、身は魚で、顔が龍のような形相をしている。二匹の龍は左右から互いに向き合うように対をなした透かし彫りで「魚身変龍隅飾」という。丁度右側に位置すると思われる龍の裏面に「宗経」の銘が刻まれている。この隅飾りの彫り物を中心に当館に収蔵されている「田名宗経」の作品を紹介したい。

田名宗経について

当館に所蔵されている「宗経」及び伝田名宗経と言われている作品は、①十六羅漢像が彫りこまれた椰子の実の蓋物、②宗経の作品と言われる龍頭観音像、③同じく龍の彫り物が施されている「雲龍丸型東道盆」、及び④「魚身変龍隅飾」の4点になる。このうち銘

が刻まれているのは①の椰子の実の蓋物（椰子小）と④「魚身変龍隅飾」の2点である。①は「球陽宗經作」で、④は前述のとおり、いずれも陰刻で表されている。彫刻としての技術は高く、精巧を極める。ただ、③の東道盆は他の3点と比べると威圧感がなく、彫り物自体平板である。とともに、全体的にアンバランスな印象を与えるのは否めない。

田名宗經（1798～1865）、唐名を梅帶華と言う。田名宗叙に嗣子がなく、1825年、宗經28才の時、長濱家より養子として迎えられた。喜瀬筑登之慎庸の娘真牛と結婚、長男宗伯、次男宗実が生まれる。後に真牛と離別、与座筑登之親雲上嘉計の娘真亀と再婚し、1832年に三男宗相を授かる。この宗相は父宗經のあとを継ぎ、唐名を梅宏昌と称し、彫物師として活躍する。唯一、顔写真があり、山城正忠は『梅帶華伝』のなかで、「顔の四角は鬚々たる美髯の士で、どこかにひとくせありそうな、天才肌というよりは名匠風な姿貌があると見た。…」と述べ、伝え聞くところによると技は父宗經より優れていたと記している。

宗經は宗珍入道曾孫三世田名親雲上宗和を元祖とし、三男四世宗易を小宗とする。彼はその九世にあたり、十世が宗相となる。つまり、本土からの帰化人で若狭町に移住した日本人の子孫にあたると言われる。（鎌倉芳太郎著、『沖縄文化の遺宝』二彫工芸より）1827年、薩摩に赴き、島津大御隠居様に印籠などを差し上げ、細工物を制作しながら2年ほど滞在している。この間、1828年に法眼七条左京門人・大塔勝造康から仏師職の允可相伝書一巻を譲与されている。1838年、冊封使が来琉。正使林鴻年、副使高人鑑であった。宗經の評判を耳にした高人鑑は彼を訪ね、その技に見入っていた。その時の感想を「中山梅帶華伝」として伝えている。宗經の作品にまつわる逸話は幾つかあり、西洋人の胸像についての話は彼の表現力を伝える好例と言えよう。

彼の作品には小品が多いとも言われ、龍頭、鶴、牛、鹿、仙人、牧童などや版本にも刻字している。1865年、68才で死去。現存する作品には先の当館所蔵の4点と糸満市の蓮華院の「聖觀世音菩薩像」（道光拾一年辛卯十二月琉陽宗經謹刻の銘あり。糸満市指定文化財）や龍彫木宝蔵型印籠（個人蔵）などがある。印籠は他に数点あったと言われるが詳細は不明である。

木彫・「魚身変龍隅飾」

左右対のこの隅飾りは朱漆塗りの下地に金泥を施してある。材質は不明。彫りの深い浮き彫りで、一木彫りのような外観である。細部は若干異なるが、左右対象の木彫である。裏面に彫刻はなく、片方の隅飾りに「宗經」の銘が刻まれている。胴部は魚で、頭には鬚のように頭髪が上方へひろがっている。顔面は龍の容貌である。その姿態は右から左へ、あるいは左から右へ下降していくようで、まるで空中を泳いでいるかのように見える。

このような海獣の図柄は、崇元寺本堂の天井画や臨海寺蔵の伝自了筆「渡海觀音図」に

も見ることができる。両者とも今次大戦で焼失して現存しない。(鎌倉芳太郎著『沖縄文化の遺宝』参照) 崇元寺本堂の天井画は「波浪鰐図」で、鰐が翼のように大きく、顔は龍そのもので、瑞雲に囲まれ、波間に飛ぶ姿は荒々しい。一方、三十三観音のひとつ魚藍觀音を描いたと思われる「渡海觀音図」では静かに、しかし確かに觀世音菩薩を背に乗せ、波間を行く魚を描いてあり、顔はやはり龍のような容貌をしている。「魚身変龍隅飾」はこの二つの絵画に描かれている海獣と同類に属すると思われるが、感覚的には「渡海觀音図」の海獣に近い。

「魚身変龍隅飾」は当館の記録によると円覚寺の装飾用羽目板の一部とされている。この木彫は東恩納博物館蔵であったが、首里博物館へ統合された時、収藏された。石川市にあった東恩納博物館は、いろいろな文化財を首里城跡や円覚寺跡及びその周辺から採集・発掘したという。この隅飾りもその時ひろわれたと思われるが、円覚寺にあったかどうかは不明である。

木彫・龍頭觀音像

龍の頭頂にのる觀音像を表した来迎形の像である。龍頭觀音は、觀音が衆生済度のため、種々変化し、三十三の化身を生ずると言う民間信仰・三十三觀音のひとつ。像は觀音像、龍の頭、龍の胴体、龍の足、岩と波の台座の各部分からなる寄せ木造りの木彫で、髭の一部に針金のような金属を使っている。全身は朱漆塗りに金彩を施し、龍の口、耳、鼻の中は朱色である。裏面に彫刻はなく、生漆のみで仕上げてある。像全体を正面から見ると三角の形状をしており、感覚的に安定しているが、台座は本体より重い材質を用いているため、物理的にも安定している。觀音像が乗った龍の頭は下降する龍の胴部より前に迫り出しており、台座も前の方へ傾斜している。また、龍の尻尾の先がやはり前方を指すように垂れているため、不安定感はない。

合掌手をした觀音像はほぼ左右対象で、龍の動きのようなダイナミックさではなく、それゆえ觀音像の優美さが強調されている。この作品に記名はないが、現存する作品と比較し、その彫り口から田名宗經の作と伝えられている。

羅漢浮き彫り椰子盒子

椰子の実に施された十六羅漢像の浮き彫りである。椰子の実を不定型な山形に切り離し蓋とする。そのため、一々模様を見ながらあわせる必要はなく、切り口をあわせるようになっている。この盒子の腰の部分に「球陽宗經作」の陰刻がなされている。椰子殻を利用したものだが、底部内は円形の板をはめこんである。

羅漢像は蓋の部分に7名、身の部分に9名彫られており、様々な動きをしている十六の

羅漢像からなる。その背景には麻の葉文が隙間なく彫られており、蓋の頂きは龍が彫られている。龍はひとりの羅漢が持つ入れ物から飛び出した様子を表している。図柄の彫りは細かく、十六羅漢人々の衣の模様まで丁寧に彫ってある。髪や頭髪まで毛彫りで表しているのには驚かされる。羅漢像の他には猿、虎、犬の姿も見える。

これら田名宗經の作品をみていくと、銘が異なるのに気がつく。椰子盒子の銘は「球陽宗經作」とあり、隅飾りにおいては「宗經」である。蓮華院の觀世音菩薩像は「琉陽宗經」となっている。鎌倉芳太郎氏の写真撮影メモから黒木彫刻印籠の根付には「琉球宗經」の名があり、龍彫木宝蔵型印籠（個人蔵）には「中山宗經」の名が刻まれている。また1828年に、法眼七条左京門人・大塔勝造康から允可相伝書一巻を譲与された時は「琉陽宗經田名筑登之殿」とある。この相伝書をのぞき、作品に記名されているのは「琉陽宗經」、「球陽宗經」、「宗經」、「中山宗經」、「琉球宗經」の5つパターンがあり、現存するのは先の4点である。

なお、「雲龍丸型東道盆」は蓋に龍の足を彫り、身の周辺に雲龍を表している。この東道盆は蓋と身の塗り・彫りが異なること、身の朱色が漆の発色と若干異なること、また、他の作品と比較して見ると、田名宗經作では疑問点があり、今後の検討事項にしたい。

その他の彫刻家

琉球における彫物師は中国と交流を始めたころよりあったと思われるが、康熙年間に牧湊親雲上が彫物勢頭に任じられている。その後、多数の彫物師が活躍したと思われるが、資料が少ないため、その多くを知ることはできない。1936年に首里城北殿に開館した沖縄郷土博物館の蔵のなかに若干の彫刻家が紹介されている。

それによると、田名宗經や自了のほかに5名の名前が見える。自了は画家として著名だが、彼の作品として伝えられている短刀が一振あり、雲龍の浮き彫りが刻まれている（鎌倉芳太郎著『沖縄文化の遺宝』参照）。椰子を利用し、寿老人を両面に彫りこんだ印籠の作者中山宗章。猿が樹上より水中の三日月を取ろうとしている光景を表した黒木の彫り物に宗理作の記名が見える。また、宗理は「鬼面」、「貴人面」などの面の作品もあると言う。上與那原朝信は印籠や黒木の雲龍の彫り物がある。朝信のほかに鎌倉芳太郎氏の写真撮影メモによると朝睦の名が見え、親子か兄弟かは不明である。最後に、首里城正殿玄関向拝の雲龍及び牡丹獅子像などを彫った新垣筑登之親雲上があり、18世紀ころ活躍した首里出身の彫刻家と記している。ただ、これら作品は現存しない。

木彫は石彫にくらべてあまり知られてなく、現存する作品も少ない。第二次大戦による焼失・紛失も関係するが、材質上の問題も大きい。木彫は仏教の存在と大きく関わりあっており、寺社の建立により仏像も多数安置されていく。それに影響されたのか他の木彫類

も発展していったように思える。現存する円覚寺や天尊廟の立像類から察すると、仏像は琉球で制作されたものもあったようだが、その多くは中国や日本本土から持ち込まれた物のようだ。ただ、羽目や戸板などの建築物に付随するものは大半が琉球の彫物師の手が多いと思われる。

戦前までにあった田名宗經作木彫一覧

名 称	所在地	法量 (cm)	備 考
大黒天像	臨 海 寺	高さ 7.7	
観 音 像	田名宗華氏		
田名家位牌	々	全長 58.8	
鐘蟠龍印籠	浦添朝顯氏	長さ 8.3	銘「道光24年甲辰琉調」
印籠の根付	牛 島 氏 藏	幅 3.5	印籠は朝睦
鬼 面	尚侯爵家藏	高さ 20.6	
老 人 像	尚琳男爵藏		
雲 龍 印 篠	浦添朝顯氏	高さ 21.1	

なお、上記の表は沖縄郷土博物館の栄（大正14年頃発行）と鎌倉芳太郎氏が大正10年から昭和初期にかけておこなった写真撮影メモ（複写）及び『沖縄文化の遺宝』鎌倉芳太郎著より作成した。

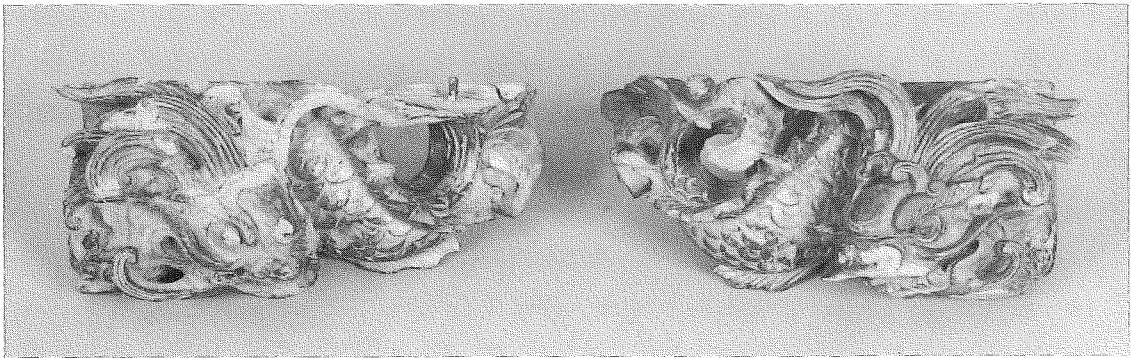
参考及び引用文献

『沖縄文化の遺宝』鎌倉芳太郎 岩波書店 昭和57年発行

『郷土博物館栄』沖縄県教育委員会付属郷土博物館 昭和14年頃発行

『龍頭観音像』（県広報誌おきなわNo.99）西村貞雄 沖縄県 昭和58年発行

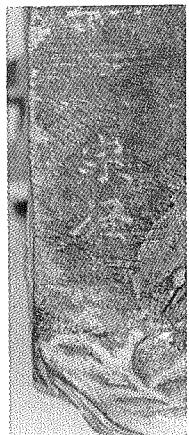
『沖縄一千年史』眞境名安興・島倉龍治 沖縄新民報社 昭和27年発行



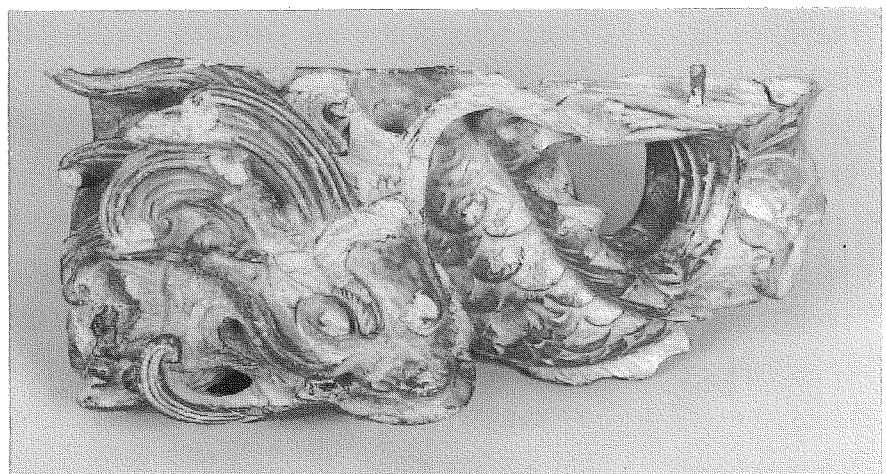
魚身変龍隅飾



同上右部分（縦 7.9cm、横 17.3cm、奥行 6.5cm）



陰刻銘部分



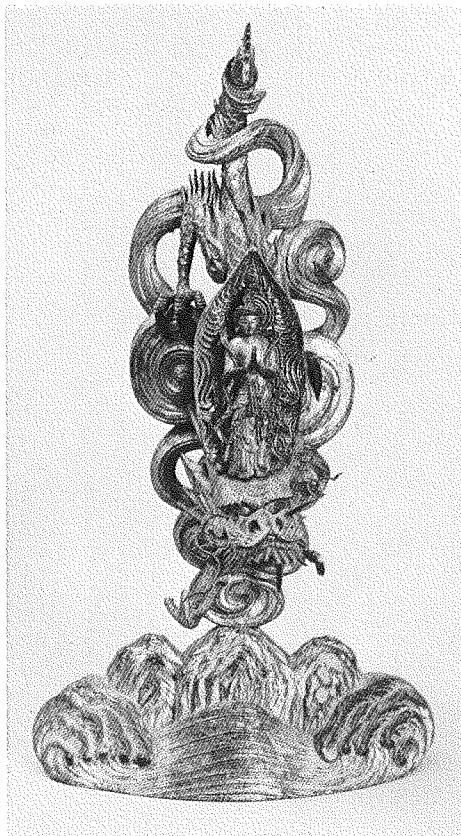
同上左部分（縦 8.1cm、横 18.0cm、奥行 6.1cm）



觀音像部分 [高 11.0cm、幅（光背）5.2cm]



龍頭觀音像
[高 37.1cm、幅（台座）20.5cm、奥行 11.7cm]



同正面



羅漢浮彫椰子盒小（高 13.1cm、幅径 12.5cm、底径 5.7cm）



陰刻銘部分



雲龍丸型東道盆（高 36.2cm、幅径 32.6cm、底径 31.0cm）